

二人の「若者」はどこに消えたのか
—共観福音書のテキスト依存関係に関する研究—

溝 田 悟 士

広島大学大学院総合科学研究科総合科学専攻

On the Deletion of Two *Neaniskoi* :
Textual Interdependence of the Synoptic Gospels

Satoshi MIZOTA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: This study is an examination that the relationship between the fleeing youth (Mark 14:51-52) and the youth announcing Jesus' resurrection (Mk. 16:5) effects the additions and deletions in Matthew and Luke. Based on the hypothesis of "Marcan Priority," the identities of the youths are established in this study. Based on philologizing patristic testimonies, traditional theories that the youth in 14:51 is identified with St. James the Just, St. John the Apostle, and St. Mark Evangelist are rebutted. And, it is proclaimed that Mark has a lexical cohesion between 14:51-52, 15:42-47 and 16:1-8 by the evidence of *neaniskos* (youth), *sindon* (linen cloth), and *periballo* (wear). As a result, on the basis of reading that a certain *neaniskos* casts off a *sindon* representing "death," it is clear that the *neaniskos* reappears while wearing a white robe representing "eternal life" against "death." Therefore, it seems reasonable to suppose that the two *neaniskoi* are regarded as St. Peter because St. Peter was the first eyewitness of

Jesus' resurrection in 1 Cor.15: 3-8. Meanwhile, it is observed that the plot of Mark consists of two temporal systems: i.e. one is represented as a line between the origin and end, and the other is based on the causality between the forenotice and the fulfillment of Jesus' Resurrection. As a result of semasiologically criticizing the connotation of "resurrect," the denotation's distinction between *egeiro* and *anistemi* establishes Mark's logical structure as follows: $[(10:38) \wedge (14:36) \supset (1:9)] \wedge [(1:9) \supset (15:25)] \wedge [(15:37-38) \equiv (1:10-11)] \wedge [(16:1-8) \supset (1:35-36)]$. Therefore, the absence of Jesus Resurrection story in Mark is fulfilled in 1:35-36 by the re-reading system. Then, the Synoptic Gospels have a common sense that those who rise up from the dead are as the angels that are in heaven (Mk.12: 25, Mt. 22:30, Lk. 20:34-36). This common sense explains the reason for the mutual omission of Mk. 14:51-52 in Matthew and Luke. In Matthew, the author adds "the Saints' Resurrection"(27:51-53) immediately after Jesus'

death. Therefore, Matthew's readers can recognize a temporal linkage between Jesus' death and His Resurrection by the "earthquake." On the other hand, the Author of Luke rewrote Mark's youth in the empty tomb as "two men" (24:4). The fact that the women recognize "two men" as "angels" in the Emmaus story (24:13-35) leads readers to the recognition that the persons who rise from the death resemble "angels" through human eyes.

第一章 問題の所在と分析方法

本研究では、マルコ福音書の「逃亡する若者」(14:51-52)と「空虚な墓」物語(16:1-8)の「若者」の関連性と、そのマタイ、ルカ両福音書に対する影響を考察対象として取り上げた。第一章では、本研究の目的の説明と、さらに分析のための方法論を検討した。共観福音書の分析方法として現在の学界で最有力の仮説は、マルコ福音書が最初に成立した福音書であるとする「マルコ優先説」であり、本研究もそれに従った。その上で、問題設定を明確にするため本研究の目的を、次の三点に集約した。(1) マルコ福音書の空虚な墓の「若者」と逃亡する「若者」には関連はあるのか。(2) マルコ福音書の空虚な墓の「若者」の正体は何者なのか。(3) マタイ、ルカ両福音書において、これら二箇所の「若者」が削除されたのはなぜか。

第二章 若者の身元に関する文献学的 遡及分析

第二章においては、「逃亡する若者」の箇所が過去にどのような人物と同定されてきたかという観点で、解釈の歴史的系譜を明らかにした。その結果、すでに忘れ去られていた無名の写字生の加筆による「イスカリオテのユダ説」の痕跡や、エピファニウスに起源する「義人ヤコブ説」、アンブロシウスに起源する「使徒ヨハネ説」、さらには批判的立場を標榜する研究者の間で広く支持されている「筆者マルコ説」などの系譜が明らかとなった。しかしこれらの仮説は、他の福音書との調和のためや、信仰の増進のためなどの動機に基

づく二次的な生成過程を経ており、批判的立場とは相容れないため、選択肢から排除すべきことを主張した。一方で、マルコ福音書の「逃亡する若者」と「空虚な墓」物語の「若者」を同一視し、「引喩」で新たな物語を創作している『秘密のマルコ福音書』のような、先駆的な発想の存在も指摘した。

第三章 マルコ福音書の *neaniskos* に 関する言語学的分析

第三章では、マルコ福音書において「逃亡する若者」と「空虚な墓」の若者とが同一人物であるとの一部でなされてきた主張の妥当性を、結束性や形式意味論、さらにはメンタルスペース理論などの言語学的手法を用いて検証した。まず、マルコ福音書において、*neaniskos* (若者)、*sindeon* (亜麻布)、*periballo* (着る) が出現する場面(14:51-52、15:42-47、16:1-8)の間に語彙の結束性が存在し、イエスの遺体が巻かれる「亜麻布」は「死に装束」であり、若者は「死に装束」から「白い長い衣」に着替えた、という「文脈比喩」を構成しており、若者は同一人物の可能性が高いと主張した。しかし、「白い長い衣」が示している対象は判然としない。そこで、メンタルスペース理論を用いることで、イエスがこの若者で表された弟子の「身代わり」となって「死」に、その若者は「亜麻布」で表現された「死」の逆写像に当たる「生命」を暗示する新たな衣類を着て再出現している、ということが判明した。そして次に形式意味論を用いて、マルコ福音書の中のイエスに *sunakoloutheo* (「従う」) という述語を取る人物の集合は5:37と14:51からペトロ、ヤコブ、ヨハネの三つの定項と「若者」の四者であり、この若者は先の三つの定項から選択される推測が成り立つことを示した。その上で、読者が暗黙の了解としている第一コリント15章という前提から、三人の中からはイエスの復活を最初に知った人物であるペトロが選ばれるということを示した。また、そのペトロが座っている右側に関して、残ったヤコブとヨハネのイエスの左右の座を巡る地位争い(10:35-40)において、ヤコブとヨハネは左右に座れないにもかかわらずイエスと同じように「洗礼」と「杯」

を受けるといふ（殉教を暗示する）、イエスによる予告を根拠として、ヤコブとヨハネ以外の右側に座った殉教している人物だという結論を得た。さらに、著者の執筆までには既に殉教していたペトロが、復活し「永遠の生」を獲得することを願って、「若者」の姿で登場させてイエスの復活を告げていると可能性を指摘した。

第四章 *Neaniskos*による復活宣言と文学構造との関連

第四章では、以上までのマルコ福音書の内容がその構造も決定していることを明らかにした。まず、マルコ福音書のテキストは16:8の *ephobounto gar*（「恐ろしかったからである」）で突然切れているが、これはギリシャ語としては「不連続」であり読者に対して、「一見多少とも蓋然性のセットの外にあるように考えられるような生起」が伝える「第三次情報性」を与える。従って、読者は「不完全」なテキストと認識し、不完全である動機を見つけ出す「降格」を行おうとする。その探索における選択肢の候補に、以前から指摘されてきた「再読」もあると指摘したが、それは再読のための補助的な動機にしかすぎず、本質的動機は福音書に内在する語彙の問題だとも主張した。まず、復活を意味する *egeiro*＜目覚めさせる＞と *anistehmi*＜立たせる＞という「表示義」が、＜復活する＞という「共示義」によって混同して理解されてきたと批判した。その上で、十字架に付けられた後＜目覚めさせ＞られるというイエス自身による予告(14:27-28)は空虚な墓の若者の発言で実現(16:7)しているが、一方で三度(8:31; 9:31; 10:34)行っている三日目に＜立ち上がる＞というイエス自身による予告は実現しないという対立がある。従ってこの対立により、マルコ福音書は[(10:38)^(14:36)^(1:9)]^[(1:9)^(15:25)]^[(15:37-38)^(1:10-11)] / [(16:1-8)^(1:35-36)]のように結末と冒頭が対をなし、読者が再読によってイエスの復活について理解できるような構造を持つと主張した。さらに、物語進行で理解される開始点Aと終了点Bという二点間の直線で表現される時間系 α と、イエスの予告とその完成との「因果関

係」に基づいている時間系 β という二つの時間の存在を指摘した。さらに、*sxizo*（裂ける）による語彙的結束性によって、「臨終」の場面（15:38）は、死によって肉体から去ったイエスの霊が「受洗」（1:10）の瞬間に＜目覚めさせられ＞て戻ってくる瞬間であり、イエスの予告は再読した後の1:35-36で実現する設計となっていると指摘した。

第五章 「若者」の削除によるマタイ、ルカ両福音書における加筆

第五章では、マタイ、ルカ両福音書の著者がなぜマルコ福音書の二人の「若者」を削除したのかが明らかにした。まず、共観福音書の著者たちはすべて「復活した人間は天使に似た存在である」という共通の認識を持っている（マルコ12:25、マタイ22:30、ルカ20:34-36）ことを確認した。これを共通認識として、各福音書の著者は「空虚な墓」でイエス復活を宣言する登場人物の配役を変更している。まずマタイ福音書における、「空虚な墓」物語（28:1-3）と「聖徒の復活」（27:51-53）の間は「地震」によって関連性が認められる。マタイ福音書の著者は、マルコ福音書の二箇所の若者を同一人物と読み取り、マルコ福音書の復活理解を継承した。そして、時間系 β の読みによって神殿の垂れ幕が裂けたイエスの臨終の瞬間に死人の復活は起こっていると理解し、死人の復活がイエスの身代わりの死によって起こることを読者に明確にするために「聖徒の復活」を新たに付加したと考えられる。さらに、マルコ福音書の「若者」という語を継承すると誤解を生じるため、「空虚な墓」の「若者」という登場人物は「天使」へと変更し、「逃亡する若者」も削除された。ルカ福音書では、空虚な墓物語の登場人物は「二人の人」（24:4）に変更されている。エマオ物語の中で「二人（の弟子）」が婦人たちが「天使たち」に会ったといていた（24:22-23）が、著者自身の「言明」と矛盾する。従って、人間である婦人たちの目から見て「天使」に見えるので、共観福音書の前提から「天使に等しく」「死ぬことがない」既に死んだ「二人」が意図されている。それはエマオ物語に登場する「二人」の弟子自身であることを明

らかにした。

終章 結論：共観福音書相互の構造的 依存関係

本論文は第一章に掲げた三点の問題を下記のように解明した。(1)「逃亡する若者」と「空虚な墓」の若者は同一人物である。(2)「若者」は最初のイエス復活の目撃証人とされる死後復活した人物である。(3)「逃亡する若者」はイエスが復活したことを告知する登場人物が交代したことで必要なくなったため削除され、代わりにその登場人物の属性を説明する別の物語、つまりマタイ福音書では「聖徒の復活」、ルカ福音書では「エマオ物語」が加筆されている。

この登場人物の違いについては従来十分に研究されてこなかった。しかし本研究によって福音書においてキリスト教の核心部分である復活信仰がどう表現されたかについて、新たな見解を提示したという点で非常に重要である。従って、本論文の研究成果は、キリスト教初期の信仰表現の発展過程の解明に寄与するであろう。

引用文献

- Allen, Rupert. "Mark 14,51-52 and Coptic Hagiography." *Biblica* 89 (2008): 265-68.
- De Beaugrande, Robert and Wolfgang U. Dressler. *Introduction to Text Linguistics*. London: Longman, 1981.
- Fauconnier, Gilles. *Mental Space*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- Neiryneck, Frans. "La Fuite du Jeune Homme en Mc 14, 51-52." *Ephemerides Theologicae Lovanienses* 55 (1979): 43-66.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. *Cohesion in English*. London: Longman, 1976.
- Jenkins, Allan K. "Young Man or Angel." *Expository Times* 94(1983): 237-40.
- Migne, J. -P. ed., *Patrologia graeca*. 162 vols. Paris, 1857-1886.
- Migne, J. -P. ed., *Patrologia latina*. 217 vols. Paris, 1844-1864.
- 溝田悟士「マタイ、ルカ両福音書におけるマルコ 14:51-52の共通削除について」(『欧米文化研究』第17号: 2010年) 63-78.